対象作品／ヘミングウェイ著『老人と海』新潮社

老人と僕

弘前市立東中学校　千葉晴登

今年の七月、中学生として最後の大会があった。それまでずっと東北大会出場を目指して練習に励んできたのに、僕は自分の力を出し切れず、あっさりと負けてしまった。これまでの人生の中で、最大級の悔しさを味わい、僕の部活動は幕を閉じた。生活の大半を占めていた部活動がなくなり、悶々と過ごしていた時に出会った本が、この『老人と海』である。ノーベル文学賞を受賞した有名な作家ヘミングウェイの作品だし、題名が夏っぽいし、表紙がかっこいいし……それくらいの軽い気持ちで読み始めた。

この話はある老いた漁師が八十四日間の不漁の末、三日にわたる死闘を繰り広げてようやく大魚を捕らえたにもかかわらず、港へ向かう帰路で獲物をサメに食われてしまう、というものだ。読み終えた後、老人と僕との共通点を見つけた。それは、長い時間諦めずに挑み続けてきたのに、「良い結果が得られなかった」ことである。この老人は、大魚をものにするまで実に忍耐強く努力を重ねている。しかもたった一人で……捕らえた大魚の抵抗を弱めるために綱をたぐって手を切り、大魚に引っ張られて舟上に倒れ、満足に飲食することもできず、さらに昼間は灼熱の太陽に、夜には寒さにさらされても、老人は決して大魚を仕留めることを諦めないのだ。また、仕留めた大魚を狙ってサメが何匹も現れては大魚を食らうのだが、そこでも老人はサメと必死に闘い、大魚を守ろうとする。努力の甲斐なく、港に着く頃には大魚はほぼ骨だけの状態になってしまうのだが、老人は決して大魚を放そうとはしなかった。大魚を放せば、サメに襲われるリスクを回避できたはずなのに。目の前のことにがむしゃらに向かうこの老人に、親近感を感じた。部活をやっていた時の僕もそうだった。「試合に勝つ」という目標は常に心の中にあったが、いざ練習が始まると、試合のために動いているのではなく、ただひたすらにボールを追いかけ、ボールを打って……その感覚がたまらなく好きだった。老人が大魚と向き合った時も、同じような状態だったのではないだろうか。そしてま

た「なんて残酷なのだろう」とも思った。人生にはどんなに頑張っても報われないことはあるのだということを老人の姿から改めて感じた。もしかしたら、世の中にはそういうことの方が多いのかもしれない。

しかし、残酷な経験をしたはずの老人の姿から、悔しさを読み取ることができなかった。死闘を繰り広げた大魚をいつの間にか「兄弟」と呼び、駆け引きを楽しんでいる。サメの襲来に至っては、獲物を守るという意識よりも、仲間を守るような意識が強いのではないかと感じるほどである。残念な結果となって帰港した老人からは、後悔や悔恨が一切感じられないのだ。ここが僕と老人との違いである。最近の僕は後悔の塊だった。「あの時もっとこうしていれば」「本当は勝てたかもしれないのに」などとついつい考えてばかりいた。でも、老人は全てが終わったあと、「もはや何の思いもなく、いかなる感情も湧かない。もうすべてが過ぎ去ったのだ。」と語っている。

この違いは何から来るのか？なぜ後悔しないのだろうか？たぶんそれは、老人が良い意味で燃え尽きたからだと思う。大魚と全力で向き合い、その時できる最善を尽くして、生きて帰港できたからなのだ。「漁師」としては良くないのかもしれない。でも「大魚の相手」として、「人間」として、最大限の力で目の前の出来事と向き合ったからこそ、燃え尽きることができたのではないだろうか。そして、それが僕にはまだ足りなかったのかもしれない。あの頃の僕には、無意識のうちに迷いや甘えがあったのかもしれない。老人の達観した姿勢と比べたら、悶々としている僕なんてまだまだだ。

そしてもう一つ、忘れてはならないのは、「少年」の存在だ。かつては老人と一緒に漁に出ていた少年。どんなに不漁でも老人を信じ、気に掛けてくれる少年の存在があるからこそ、老人は生きることも闘うことも諦めないのだろう。僕だってそうだ。一緒に練習してきたチームメイトがいたから、どんなに辛い練習でも、折れずに頑張ることができた。「わかってくれる誰か」がいてくれることは、大きな力になるものだ。

「老人」は部活動を引退し、メンタルが弱っていた僕に大切なことを気づかせてくれた。物事は結果ではない。過程が大事。でも、その過程で最大限の力を出すことがこれからの僕の課題。「老人」もたくさんの経験を積んできたのだ。僕も何度でも挑戦してみよう。今の僕には、やるべきこともやりたいこともたくさんあるのだから。